

## 接続助詞ケドの発話解釈過程と聞き手の言語的反応との関わり

永田 良太

(キーワード：ケド，用法，発話の解釈過程，あいづち)

### 1. はじめに

先行研究で指摘されるように，接続助詞ケド<sup>1</sup>は様々な用法を持つ（国立国語研究所1951，森田1980など）。永田・大浜（2001）は，それらの指摘にもとづいて，接続助詞ケドの用法を以下の六つに分類している。

- ①逆接用法　　：雨が降ったけど，運動会は行われた。
- ②対比用法　　：兄は背が高いけど，弟は背が低い。
- ③前置き用法　：悪いけど，お金貸してくれない？
- ④提題用法　　：明日の天気ですが，明日は全国的に晴れるでしょう。
- ⑤挿入用法　　：この前貸した本を明日，もし無理だったら明後日でもいいんだけど，返してくれる？
- ⑥終助詞的用法：すみません。道をうかがいたいんですけど。

（永田・大浜2001，p.62）

次節で述べるように，永田・大浜（2001）はこれら六つの用法間の関係について考察しており，そこでは「逆接用法」と「対比用法」，そして「前置き用法」と「提題用法」，「挿入用法」，「終助詞的用法」とがそれぞれ密接な関係にあり，前者と後者とは発話の解釈過程が異なることが指摘されている。では，そのような発話の解釈過程の違いは発話の解釈者である聞き手の言語的反応にどのように反映されるのであろうか。

会話における発話の聞き手は，単に相手の発話を解釈するのみではない。堀口（1997）が指摘するように，聞き手は相手の発話に対して様々な言語的・非言語的反応を行っている。そのような聞き手の反応が生じやすい場所の一つとして接続助詞ケドの後（従属節末）が挙げられる（水谷2001）。また，複文発話の場合，主節末は文の切れ目に相当するため，聞き手の反応が生じやすいと考えられる。永田（2009）はこれら二つの環境に着目することで，発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応は密接に関わることを明らかにしている。永田（2009）によれば，文の階層構造上（南1974,1993参照），B類に分類されるタラよりもC類に分類されるケドやカラの従属節末には多くの言語的反応が見られるという。では，同じ「ケド」という形式によって表される上記の用法間には，聞き手の言語的反応に関して違いが見られるのであろうか。本稿においては，永田（2009）と同様に，従属節末，主節末という二つの環境に着目し，各用法の発話に対する聞き手の言語的反応を明らかにする。その上で，各用法の解釈過程と聞き手の言語的反応との関わりについて考察を行う。

### 2. 接続助詞ケドの解釈過程

まず，[AケドB]という発話が解釈される際に，聞き手にはどのような解釈過程が成立しているのかについて，永田・大浜（2001）にもとづきつつ，確認しておきたい。永田・大浜（2001）によれば，接続助詞ケドは，文脈中で発話を解釈することによって聞き手に顕在化する想定を「否定」する機能を持つ。そのような「否定」は「棄却」と「抑制」というかたちで実現され，「逆接用法」と「対比用法」は前者に，「前置き用法」，「提題用法」，「挿入用法」，「終助詞的用法」は後者にそれぞれ相当するという。両者の関係は図1のように表される。

例えば，「雨が降ったけど，運動会は行われた。」という発話の解釈において，「雨が降れば運動会を行うことができない」という知識の呼び出し可能性が高められた文脈で前件の「雨が降った」が解釈されれば，「運動会は中止される」という想定（図中のX1）が即座に聞き手に顕在化するであろう。聞き手はこれを用いて後件

の解釈を行うことで、そのような想定が棄却される（「運動会は行われた」）という認知的効果を、より少ない労力で得ることが出来る。「逆接用法」と「対比用法」にはこのような「棄却」の解釈過程が成立している。

一方、友人と出会った直後に「悪いけど、お金貸してくれない？」という発話が行われた場合はどうであろうか。この場合にも前件から様々な想定を導き出すことは可能であるが、そのために推論を重ねることには多くの認知的コストを要する。その上、それが報われるという保証もない。従って、この場合には前件の解釈をいったん保留して後件の解釈に移り、そこで「否定（抑制）」の関係を成立させるという解釈過程が成立すると考えられる。先の例では、当該文脈で「お金貸してくれない？」という発話を行った際に生じるであろう「不躰だ」や「失礼だ」などといった想定（図中のX2）が前件によって抑制されることで、依頼内容に対する話し手の配慮が聞き手に示されることになる。このような「抑制」の解釈過程が「前置き用法」、「提題用法」、「挿入用法」、「終助詞的用法」には成立している。

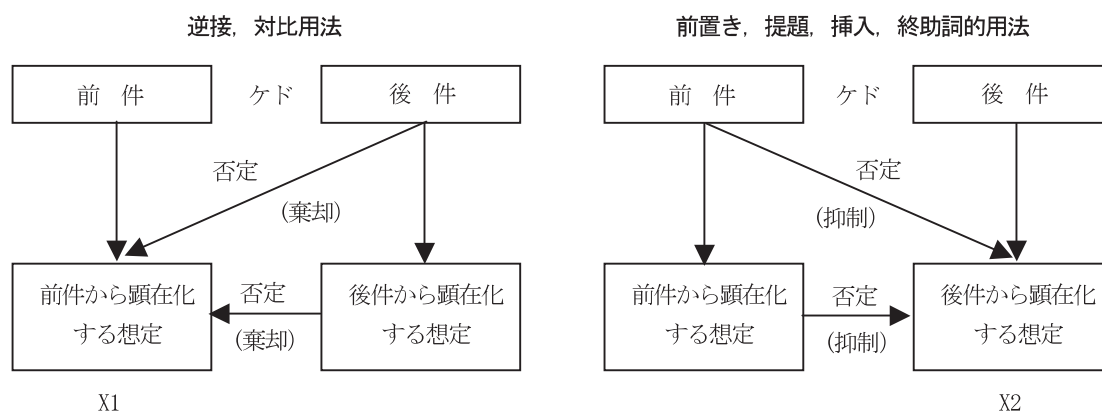


図1 接続助詞ケドの解釈過程

(永田・大浜2001, p.69)

### 3. 会話中の発話に対する聞き手の反応

本稿では、永田（2009）の分析の枠組みを用いて、接続助詞ケドの従属節末と主節末における聞き手の言語的反応について分析を行うが、分析に先立ち、会話中の発話に対する聞き手の反応について、永田（2009）にもとづきつつ、まとめておく。

堀口（1997）が指摘するように、会話における聞き手は、発話を理解するに際して、様々な反応や働きかけを話し手に対して積極的に行っている。そのような聞き手の反応は非言語的なものと言語的なものとに大別される。このうち、本稿で分析対象とする言語的な反応には、実質的な発話とあいづち的な発話とがある。杉戸（1987）によれば、実質的な発話とは「なんらかの実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など、事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話」であり、あいづち的な発話とは、そのような働きかけがなく、応答詞や感動詞のように実質的な内容を表さない言語形式や繰り返しの発話などである（p.88）。

堀口（1988）によれば、あいづち的な発話は生起する位置によって二つに分類される。一つは「はい」や「うん」などのように、句の切れ目であれば自由に打たれるものであり、もう一つは「そうですね」や「なるほど」などのように、情報が充足された時に打たれるものである。前者には「はい」、「はー」や「え」、「えー」といった話し手の感情を直接的に表す感声的表現（小宮1986）が用いられ、後者には「なるほど」や「ほんと」といった元来は概念を表す形式である概念的表現（小宮1986）および「そう」、「そうですね」などが用いられる。本稿で分析を行う従属節末と主節末における聞き手の言語的反応には情報の完結性・非完結性が関与すると考えられるため、本稿ではこのようにあいづちが生起する位置の自由度に注目してあいづち的な発話を分類し、永田（2009）に従い、前者を「自由型」、後者を「制約型」と呼ぶ。但し、同じ「自由型」もしくは「制約型」のあいづちであっても、形式の違いによって談話の中で果たす役割が異なるため、この点にも留意しつつ考察を行う。

また、杉戸（1987）と同様、本稿では「繰り返し」や「言い換え」も広義の「あいづち」として考える。その際、「言い換え」は発話内容としてはそれ以前の発話の繰り返しであるため、「繰り返し」として一括して扱う。「繰り返し」は生起する位置の自由度は高いが、実質的な内容を表すという点で自由型のあいづちとは異なる。

また、そこで表される内容はそれ以前の発話をなぞったものであり、判断や説明などといった聞き手に対する積極的な働きかけを有しない点で実質的発話とも異なる。

これらの自由型のあいづち、制約型のあいづち、繰り返しの発話を、永田（2009）に従い、本稿では「あいづち詞」と呼ぶ。また、相手の発話が終了する以前に聞き手から送られる「先取り」型の発話（堀口1997）も資料中に1例見られたが、本稿においてはこれを実質的発話に含めて考察を行う。以上のことをふまえると、会話中の発話に対する聞き手の言語的反応は、a. あいづち詞（①自由型、②制約型、③繰り返し）とb. 実質的発話とに分類される（永田2009）。

ここで、永田（2009）でも指摘されるように、同じく発話に対する反応であっても、a. 「あいづち詞」とb. 「実質的発話」とでは当該発話との関係が異なる。「あいづち詞」は当該発話に対する反応として用いられるものであるのに対して、「実質的発話」は、当該発話とは無関係に、新たなトピックを導入する際にも用いられる。このように、会話中の発話に対する言語的反応には、当該発話との関わりを前提にするもの（「あいづち詞」と必ずしも前提にしないもの（「実質的発話」）とがある。本稿においては、このうちの「あいづち詞」を中心に、接続助詞ケドの従属節末と主節末における聞き手の言語的反応を明らかにし、前節で見た各用法の解釈過程との関わりについて考察する。

#### 4. 分析資料と分析対象

本稿で分析資料として用いたのは2000年から2001年にかけて広島大学で採取された12の自由談話である。参加者は22歳から30歳までの大学院生もしくは大学職員であり、それぞれ面識のない相手と30分程度個室で会話してもらったものである<sup>2</sup>。会話はテープレコーダーに録音された。会話のトピックについては特に指定されず、時間がきたら適当に会話を終結させて部屋を出るよう片方の参加者に指示が与えられた。

ここで、接続助詞ケドによって構築される従属節は、「挿入用法」や「終助詞的用法」のように、談話内で独立して用いられることがある。また、談話内では「従属節＋従属節＋主節」のように、文中に従属節が二つ以上含まれる場合も見られる。本稿においては、従属節末と主節末に着目して分析を行うため、これらは分析対象から除外し、談話の中で見られた「従属節＋主節」という形をとる「逆接」、「対比」、「前置き」、「提題」という四つの用法について分析を行う。

なお、国立国語研究所（1960）や丸山（1996）で指摘されるように、話しことばでは文の様々な要素が省略される。本談話資料中にも「ちゃんと覚えてないけど、なんかの跡地。」のように、主節の述語的要素が省略された発話が見られたが、本稿ではこのようなものも主節として考える。また、[AケドB]という発話の連鎖のBを主節と見るか（[Aケド, B]）、新たな文と見るか（[Aケド. B]）に関して、本稿ではAとBの意味的關係および文脈から判断した。

#### 5. 従属節末における聞き手の言語的反応

##### 5. 1. 言語的反応の有無

まず、「逆接」、「対比」、「前置き」、「提題」の各用法の従属節末における聞き手の言語的反応の有無についてまとめたものが図2である<sup>3</sup>。なお、図中の数字は言語的反応の有無の数を表す。以下の図3～6においても同様に、割合をグラフで表し、出現数を数字で示す。また、野口・片桐・伝（2000）や榎本（2007）が指摘するように、ある発話に対する聞き手の言語的反応は発話が休止・終了する以前から生じる場合もあれば、発話が休止・終了後、間において生じる場合もある。但し、それらの反応に関しては、それが従属節末や主節末の各要素に対する反応であるかどうかを同定することが困難である。そこで本稿では、永田（2009）と同様、あいづちが高頻度で生起する（野口・片桐・伝2000参照）従属節末および主節末の後500msc以内に生じた言語的反応について分析する<sup>4</sup>。

図2から、従属節末における言語的反応の有無に関して、用法間で違いが見られることが分かる。逆接用法や対比用法の従属節末では聞き手の言語的反応が見られないことが多いのに対して、前置き用法や提題用法の従属節末では聞き手の言語的反応が生起する割合が高い。

第2節で見たように、逆接用法や対比用法の解釈過程では、後件で棄却される想定が前件の解釈時に顕在化するのに対して、前置き用法や提題用法では、ケドによって示される「否定」の關係がどのように実現されるかは

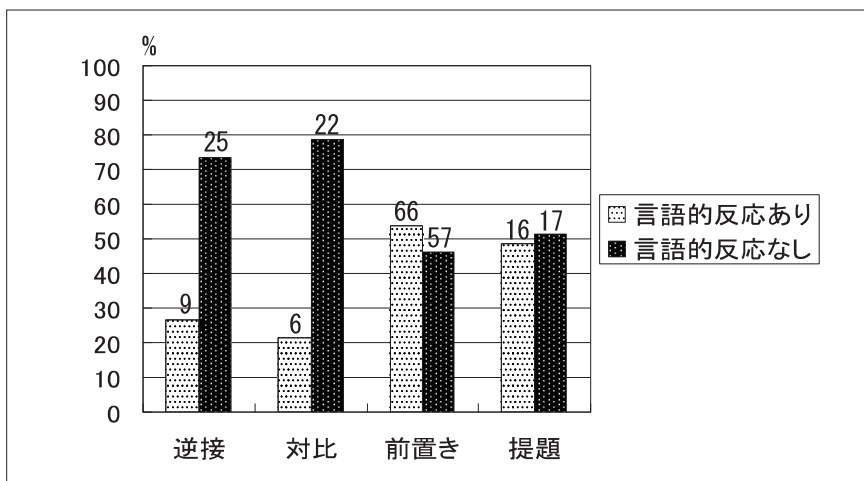


図2 各用法の従属節末における言語的反應の有無

後件の出現を待たなければならない。図2に見られるような聞き手の言語的反應数の違いはこのような解釈過程の違いを反映したものであると考えられる。以下に見るように、図2における言語的反應の大半はあいづちであるが、水谷（1988）が指摘するように、あいづちには相手からのその後の発話を促す働きがある。前置き用法や提題用法の従属節末に「あいづち」という言語的反應が多く見られるのは、ケドによって示される「否定」の関係がどのような想定間で実現するかが不明瞭な状況にあって、後件の発話を明示的に求めることで、それを追求しようとする聞き手の態度の表れであると言えよう。

### 5. 2. 言語的反應の種類

先に見た図2の「言語的反應あり」の部分について、その内訳を示したものが次の図3である。なお、談話中には「あー、そうですね」や「へー、いつですか?」のように、自由型のあいづちと制約型のあいづちもしくは実質的発話が組み合わされたものも見られた。これらの発話は、生起位置の自由度に関して言えば、後部要素の特徴を有していると考えられるため、本稿ではこれらの発話をそれぞれ「制約型」、「実質的発話」として扱う。

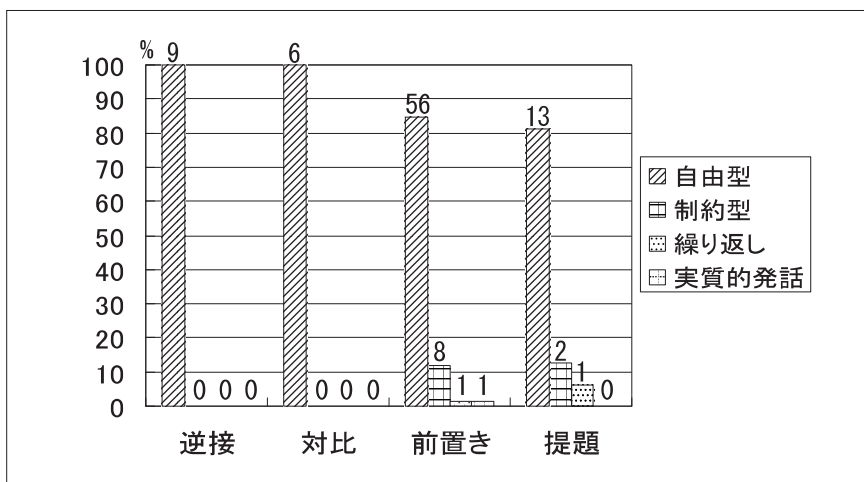


図3 各用法の従属節末における言語的反應の種類

図3を見ると、自由型のあいづちが極めて多いという点で四つの用法は共通している。但し、前置き用法と提題用法においては、自由型のあいづちに加えて、情報の充足性を前提とする制約型のあいづちも見られる。これは第2節で見たように、これらの用法が挿入用法や終助詞の用法といった独立性の高い用法と連続的な関係にあることと関わると思われるが、用例数が少ないため、この点については今後さらにデータを追加して考える必要がある。

以下においては、四つの用法ともに最も多く見られた自由型のあいづちについて、形式的な側面から分析を行う。各用法の従属節末に見られた自由型あいづちの種類と出現数についてまとめたものが次の表1である。



表1 各用法の従属節末における自由型あいづちの種類と出現数

逆接 (9例)	対比 (6例)	前置き (56例)	提題 (13例)
うん (5例)	うん (4例)	うん (26例)	うん (3例)
あー (3例)	あー (1例)	あー (6例)	はいはいはい (2例)
えー (1例)	うんうん (1例)	はい (5例)	あー (1例)
		へー (5例)	えー (1例)
		はー (4例)	はー (1例)
		あーあー (3例)	へー (1例)
		あ (1例)	えーえー (1例)
		うーん (1例)	はいはい (1例)
		ほー (1例)	あーあーあー (1例)
		はーはー (1例)	うんうんうん (1例)
		はいはい (1例)	
		ほーほー (1例)	
		うんうんうん (1例)	

表1から、従属節末に見られる自由型あいづちの種類に関しては、用法間で違いが見られることが分かる。逆接用法や対比用法では特定の形式に偏る傾向があるのに対して、前置き用法や提題用法では多様な形式のあいづちが見られる。その中でも注目すべきは、「はいはい」や「あーあー」のように、同一の形式を繰り返す反復型のあいづちが多く見られることであろう。

反復型のあいづちは、単独型のあいづちに比べて、理解や共感を表す度合いが強いと考えられるが、このようなあいづちが多く見られることもこれらの用法の解釈過程と密接に関わると考えられる。先にも述べたように、前置き用法や提題用法における前件は後件から顕在化するであろう想定を抑制する働きをするが、そこで抑制される想定は話し手にとって顕在化することが望ましくないものである。そのような想定を抑制するための前件の解釈が確実に行われたことが反復型あいづちによって示されることで、話し手は後件の発話へと円滑に移行することができる。即ち、前置き用法や提題用法の従属節末に特徴的に見られる反復型のあいづちは、前件に対して強い理解や共感を示すことで、後件の発話を促し、「否定」の関係の追求に貢献すると考えられる。

## 6. 主節末における聞き手の言語的反応

次に、主節末における聞き手の言語的反応について見る。「逆接」、「対比」、「前置き」、「提題」用法の主節末における聞き手の言語的反応の有無について調べたものが図4である。

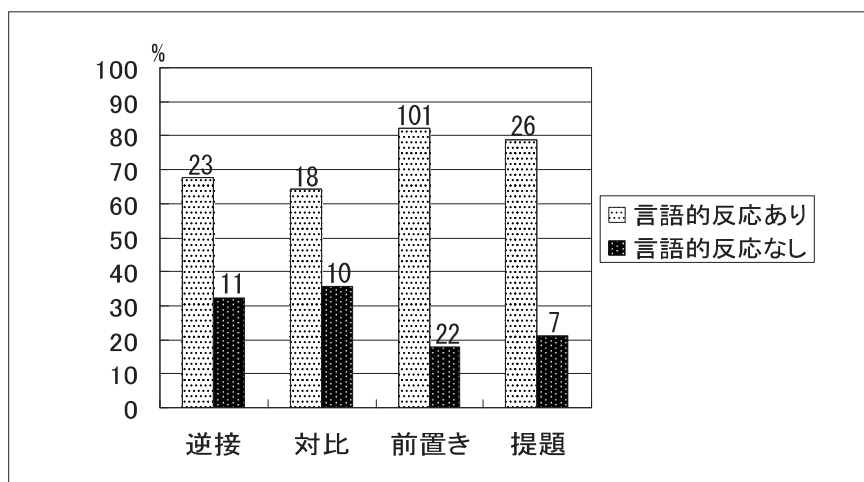


図4 各用法の主節末における言語的反応の有無

図4から、主節末においてはいずれの用法とも言語的反応が多く見られることが分かる。この点で、図2で見

た従属節末とは異なる。では、そこで見られる形式についてはどうであろうか。図4の「言語的反応あり」の部分について、各用法別にその内訳を示したものが図5である。

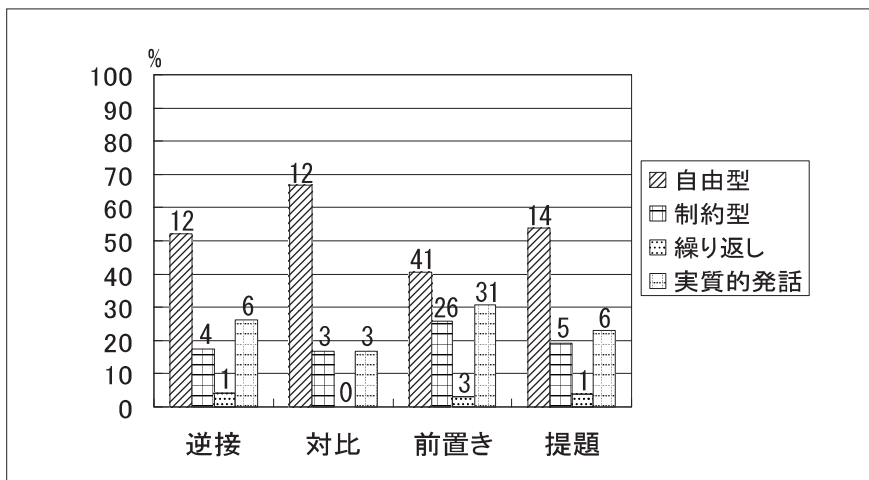


図5 各用法の主節末における言語的反応の種類

図5から分かるように、いずれの用法においても自由型のあいづちが最も多く見られる。この点で先に図3で見た従属節末と同様であるが、図3と比較すると、主節末では制約型のあいづちと実質的発話が顕著に多く見られることが分かる。これは、用法に関わらず、「ケド」によって表される「否定」の関係が主節末において成立し、情報が充足されることによるものであろう。以下の表2は全ての用法で最も多くの言語的反応が見られた自由型のあいづちについて、その内訳を示したものである。

表2 各用法の主節末における自由型あいづちの種類と出現数

逆接 (12例)	対比 (12例)	前置き (41例)	提題 (14例)
うん (3例)	あーあー (3例)	あー (16例)	うん (4例)
あー (2例)	あー (2例)	うんうん (5例)	あー (3例)
はい (2例)	はい (2例)	うん (4例)	はい (2例)
ふーん (2例)	へー (2例)	えー (4例)	へー (2例)
ほー (2例)	うん (1例)	へー (3例)	うーん (1例)
はいはい (1例)	ふん (1例)	はい (1例)	ほー (1例)
	ふーん (1例)	ふーん (1例)	はいはいはいはい (1例)
		あーあー (1例)	
		はいはい (1例)	
		うんうんうん (1例)	
		はーはーはー (1例)	
		うんうんうんうん (1例)	
		はーはーはーはー (1例)	
		はいはいはいはい (1例)	

表2を見ると、主節末に見られる自由型あいづちの種類は四つの用法間で一様ではないことが分かる。特に、前置き用法の主節末には多様なあいづちが見られ、中でも、反復型のあいづちが特徴的に見られる。先に見たように、従属節末では提題用法においてもこのような特徴が見られたが、主節末では、同じ解釈過程を持つ前置き用法と提題用法の間に違いが見られる。この点について考えるためには、解釈過程に加えて、それぞれの用法の発話が談話内で果たす役割について考えてみる必要があるであろう。

ここで、談話のトピック展開という観点から考えてみると、本談話資料中で接続助詞ケドの各用法が生起する環境は次の二つに大別される。一つ目は「問い」や「確認」など、相手からトピックが指定された環境に生起する場合であり、もう一つはそのような指定が無い環境に生起する場合である。次の(1)は前者の「指定あり」の例

であり、(2)は後者の「指定なし」の例である。

(1) <調査者 X との関係についてのトピック>

- A : X さんとどういいう知り合いなんですか？  
 B : あ、彼、俺の1つ上なんだけど、俺の仲いい先輩と同じバイトで  
 A : はーはーはー  
 B : そんな感じ  
 A : ○○ (Aの所属先) の方ですよ

(2) <修士論文の進捗状況についてのトピック>

- A : 今日、実は構想発表の時間だったにもかかわらず、実は構想が出せずに (笑)、ただの発表に終わったという  
 B : うーん、私もなんか夏休み中に1回と11月に1回、発表があったんですけど、1回目と2回目もう全然違うんですよ (笑) で、2回目と3回目はそろえたんですけど、新たな問題が出てきて (笑)、もうどうしようって (笑)  
 A : いや、でもそうなるよねー、もう  
 B : もうゼミ発表の名前消そうかなとか思ってるぐらい (笑)

例(1)では、Aの最初の発話によって、「問い」というかたちでBが次に行う発話の内容(「Xとの関係」)が指定されている。一方、例(2)では、Bの発話の内容は直前のAの発話によって特に指定されていない。このように、談話のトピック展開に関して、接続助詞ケドの各用法が見られる環境には2種類のものがあるが、各用法がこれら二つの環境のいずれに見られるかを調べたものが次の図6である。

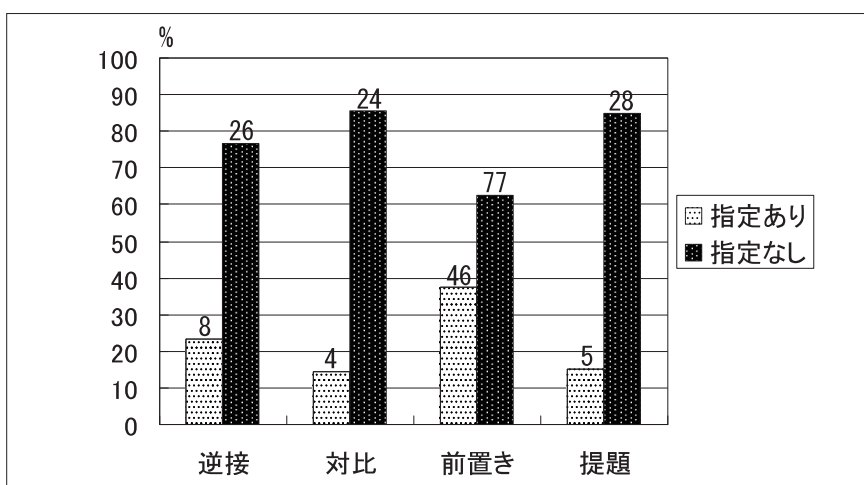


図6 各用法が見られる際のトピック指定の有無

図6から、それぞれの環境における各用法の現れ方には違いが見られることが分かる。特に、前置き用法と提題用法に関しては、同じ解釈過程をもちながら、談話中での働きが異なることがここから示唆される。

永田(2002)は自由談話におけるトピックの展開とケドの各用法との関わりについて分析しているが、そこでは前置き用法と提題用法はどちらもトピックの開始と展開に関わるという類似の働きをすることが指摘されている。上に示した例(1)と例(2)は、永田(2002)が指摘するように、いずれもトピックの展開に関わる部分に見られた例である。しかしながら、図6に示されるように、当該発話が生起する環境に着目すると、そこでの働きは異なることが分かる。

前置き用法は、例(1)のように、相手主導でトピックが展開されていく中で情報を提供する場合にも用いられるのに対して、提題用法は主として例(2)のように、自らがトピックを展開させていくときに用いられる。永田・大浜(2001)が指摘するように、提題用法では直前のトピックと後件との関連性に関する疑問の顕在化が発話解釈の際に抑制されるが、自らがトピックを展開させていく際には、特にそのような配慮が必要なのであろう。

これらのことを踏まえて、前置き用法の主節末には反復型あいづちが多く見られるということについて考えてみる。相手主導でトピックが展開されていくという前置き用法が用いられる環境は、トピックを指定した側から見れば、自らが興味・関心を持ちトピックとして指定した事柄について、相手から新たな情報が得られる環境である。そのような情報が得られたことに対する反応の表れとして、他の用法に比べて前置き用法の主節末には、強い理解や共感を表す反復型あいづちが多く見られるのであろう。

このように発話の解釈過程は同じであっても、どのような想定が抑制されるかという違いによって、前置き用法と提題用法は談話展開に異なる関わり方をする。そして、そのような関わり方の違いは、主節末における聞き手の言語的反応の違いを生じさせると考えられる。

## 7. まとめ

本稿においては、接続助詞ケドの各用法の従属節末と主節末に見られる聞き手の反応について、言語的反応の有無と言語的反応の種類という二つの観点から分析し、それを接続助詞ケドの発話解釈の過程と関連させて考察を行った。

その結果、前置き用法や提題用法の従属節末においては、前件の解釈を保留して後件の解釈に進むという「抑制」の解釈過程を反映して、多くの言語的反応が見られた。そしてそれらは、後件から顕在化するであろう想定を確実に抑制したいという発話者の意図を反映するように、前件の確実な理解や共感を相手に伝える形式のあいづちであった。永田（2009）では、同じくC類でありながら、ケドとカラには異なる部分も見られたが、その一因として、本稿で明らかにした用法による聞き手の言語的反応の違いが考えられる。

一方、主節末においては、従属節末に比べて多くの言語的反応が見られた。特に、いずれの用法においても制約型のあいづちが顕著に増加していたが、これは「ケド」によって表される「否定」の関係が後件の解釈によって成立し、情報が充足されたためであると考えられる。また、そこに見られる反応の種類の違いは、各用法が談話展開上、どのような役割を担っているかと関わる。前置き用法と提題用法は同じ解釈過程を持ち、いずれもトピックの展開に関わることが指摘されてきたが、本稿で明らかにしたように、解釈過程で抑制される想定の違いによって、その関わり方は異なる。そして、そのような談話展開への関わり方の違いから、主節末における聞き手の言語的反応の種類にも違いが見られる。

本稿で明らかにしたように、発話の解釈過程と聞き手の言語的反応は密接に関係している。今後は他の接続助詞についても分析を行うことで、両者の係わり合いに関して、さらに追究する必要がある。

## 参考文献

- 榎本美香（2007）「発話末要素の認知と相互作用上の位置づけ」串田秀也・定延利之・伝康晴（編）『文と発話3：時間の中の文と発話』203-229, ひつじ書房
- 国立国語研究所（1951）『国立国語研究所報告3 現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版
- 国立国語研究所（1960）『国立国語研究所報告18 話しことばの文型（1）－対話資料による研究－』秀英出版
- 小宮千鶴子（1986）「相づち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育研究論叢』3, 43-62, 大東文化大学語学教育研究所
- 杉戸清樹（1987）「発話のうけつぎ」『国立国語研究所報告92 談話行動の諸相－座談資料の分析－』68-106, 三省堂
- 永田良太（2002）「自由談話における接続助詞ケド－接続機能と談話展開の関わりについての一考察－」『広島大学教育学研究科紀要 第2部』50, 265-272, 広島大学大学院教育学研究科
- 永田良太（2009）「複文発話の構文的特徴と聞き手の言語的反応との関わり－ケド, タラ, カラを中心に－」『日本語科学』25, 5-22, 国立国語研究所
- 永田良太・大浜るい子（2001）「接続助詞ケドの用法間の関係について－発話場面に着目して－」『日本語教育』110, 62-71, 日本語教育学会
- 野口広彰・片桐恭弘・伝康晴（2000）「あいづち挿入行動の実験的分析」『言語・音声理解と対話処理』28, 7-12, 人工知能学会
- 堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64, 13-26, 日本語教育学会



- 堀口純子 (1997) 『日本語教育と会話分析』 くろしお出版  
丸山直子 (1996) 「話しことばにおける文」『日本語学』12 (9), 50-59, 明治書院  
水谷信子 (1988) 「あいづち論」『日本語学』7 (13), 4-11, 明治書院  
水谷信子 (2001) 「あいづちとポーズの心理学」『言語』30 (7), 46-51, 大修館書店  
南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』 大修館書店  
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館書店  
森田良行 (1980) 『基礎日本語2』 角川書店

## 注

- 1 本稿においては、ケドと同様の接続機能を持つと思われるケレド、ケドモ、ケレドモ、ガについても考察対象に含める。
- 2 談話資料の内訳は大学院生同士の談話が11組、職員同士の会話が1組であり、同性同士および異性との会話がそれぞれ6組ずつである(男-男:3組, 女-女:3組, 男-女:6組)。
- 3 被調査者毎に集計を行い比較したところ、いずれの被調査者にも概ね同じ傾向が見られ、特定の個人の結果が全体の傾向に強く影響しているということはなかった。そこで本稿では、全ての被調査者の結果をまとめて集計し、それにもとづき考察を行う。これ以降の分析についても全て同様の確認を行った。
- 4 認定に際しては、録音されたデータを電子化したものを、音声分析ソフト(「SUGI Speech Analyzer」, 杉藤美代子監修・著, ANIMO)を用いて分析した。

# **Relationships between the Interpretation Process of the Utterance and the Hearer's Linguistic Responses**

NAGATA Ryota

As previous studies point out, Japanese conjunctive particle “kedo” has various uses, and each use has its own interpretation process. But little attention has been given to the relationships between the interpretation process of the utterance and the hearer's linguistic responses involving backchannels.

This paper makes clear the following two points focusing on the two kinds of environment such as the end of the subordinate clause and the main clause,

- 1) At the end of the subordinate clause, various backchannels occur in each use, and they request the following utterance indicating the understanding the utterance and the sympathy to the speaker.
- 2) At the end of the main clause, more backchannels occur than those of the subordinate clause, and they indicate the completion of the utterance interpretation and the informational sufficiency.

These facts show us that there are close relationships between the interpretation process of the utterance and the hearer's linguistic responses.